

第II部 混成のうねり——東南アジア映画の新たな冒険

〔第II部にあたって〕

フロンティアとしての混成社会

——東南アジア映画の舞台設定

山本博之

社会の混成性を捉える上では、社会内部の諸要素間の関係と、各要素の社会外部との関係の二つの側面から見る必要がある。このことについて、マレーシアの事例を中心に簡単に整理しておきたい。

議論を簡単にするため、「社会」をマレーシア国家、「諸要素」をマレーシアの主要民族であるマレー人、華人、インド人に限定する。「社会内部の諸要素間の関係」とはマレー人と華人とインド人が互いにどの程度混じりあっているかであり、「各要素の社会外部との関係」とは、マレー人は中東と、華人は中国（中国大陆・台湾・香港）と、インド人はインド（およびバンングラデシュ・パキスタン）と

それぞれの程度の繋がりを持っているかである。一般に「多民族性」と言えば前者のような民族的多様性を意味することが多いが、今日の世界における混成性を考える上では、国内に複数の民族が存在することだけでなく、それぞれの民族が国外の地域や人々^{*2}とのように繋がっているかを見ることも重要である。

国内の各民族が国外の地域や人々と繋がっていることについて、マレーシアでは「文明」との関わりで説明されることが多い。マレー人、華人、インド人は、それぞれイスラム文明、中華文明、インド文明の継承者を自任しており、これらが集まるマレー

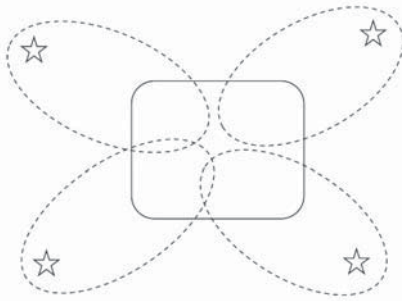


図2 社会内の諸要素の社会外部との繋がり
 (凡例) 実線：社会、破線：文明世界、星：文明の中心

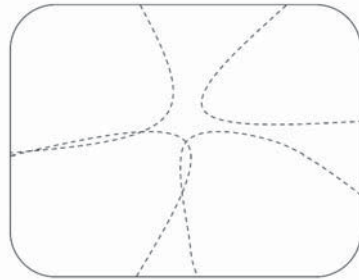


図1 社会内の諸要素間の関係
 (凡例) 実線：社会、破線：要素

シアは文明の「交わりの地」として理解されているが、このことは同時に、マレーシアを各文明世界の「周縁の地」とする理解も生むことになる。それは、世界文明には文明の中心地があり、そこから外に向けて文明が広がっており、文明の中心地から離れば離れるほど文明性が薄れると理解されるためである。つまり、イスラム世界においては中東のアラブ人が文明の中心にいて東南アジアのマレー人や他のイスラム教徒は周縁の存在であり、中華世界においては中国の中国人が文明の中心であるのに対して東南アジアの華人は文明の辺境にある。インド人についても同様である。このように、混成社会としてのマレーシアの特徴は、社会が多様な民族から構成されていることだけでなく、それぞれの民族が自分たちを世界文明の継承者と自任しながらも、自分たちが担うそれぞれの世界文明の「本場」がマレーシアの外にあり、自分たちは「本場」に比べると文明度が低い「周縁」であるという意識を持っている点にある*₃。

社会内の諸要素の背景に社会外部の地域や人々との結びつきがあるという混成社会の特徴を踏まえることは、今日の世界でグローバル化の進展に伴う人や情報の移動によって文明の「本場」と「周縁」に

関する意識が変化し、混成化の度合いが増していることを考える上で重要である。

かつての移民が出身地の様子を知らずとしたり、移住先の新聞などで断片的かつ時間差のある情報が時折得られる程度だっただろうが、現在では移住者が出身地の動静に関する情報をほぼリアルタイムで大量に手に入れられるようになり、また実際に出身地を訪れることも容易になっていく。そのため、社会外部の地域や人々との関係が周囲の動向に左右されやすく、世界的な出来事を契機に外部社会との関係についての意識が強まったり弱まったりすることがある。^{*4}

また、マレーシアの例では国内の民族と外部の世界文明が一对一の関係にあると見られているが、一般には国内の要素と外部社会の地域や人々との繋がりは一対一であるとは限らない。ある人は中国系であるとともにキリスト教徒であるかもしれないし、インド系であるとともに英語を母語とするかもしれない。^{*5}さらに、マレーシアでは社会の混成性はもっぱら民族によって語られるが、一般には外部社会との繋がりは民族以外の要素でもありうる。その意味では、現在は単一民族社会であると見られている国でも、世界的な出来事を契機に社会内の各要素がそ

れぞれ異なる外部社会との繋がりを意識するようになり、社会の混成性に目覚めるといったことも十分に考えられる。^{*6}

社会内の多様性と外部社会との繋がりの両面から社会の混成性を捉えるならば、混成社会には以下のような特徴的な課題を見出すことができる。本特集の第二部の各論考は、これらの諸課題に対する人々の対応の様子を、東南アジアを中心に映画制作に読み解こうとするものである。

混成的な社会では、自分が文明の周縁にいる「混じり物」であるという意識を抱き、そのことを消極的に捉えて、その社会を出て文明の「本場」を目指そうとすることがある。しかし、いくら「本場」の中心に近づいても、「本場」で生まれ育った真正の「本場」と比べる限り、いつになっても自分自身が「本物」ではないという思いが拭えないという苦境に陥ることになる。野澤論文では、中華文明の「本場」を目指してマレーシアから台湾に渡って映画監督として成功を取めた蔡明亮（ツァイ・ミンリヤン）の事例から、「本物探し」の旅の一つのあり方が示されている。

混成社会に生きる人々が抱える問題に、外部社会に起源を持つ「本場」のルールといま暮らししている

場のルールとの食い違いがある。現在いる社会のルールに合わせようとすれば「本場」のルールから逸脱した存在になってしまうという状況は、特に家族形成や弔いの場において抜き差しならない選択を迫ることになる。篠崎論文では、インドネシア、マレーシア、シンガポールの映画を素材に、それぞれの国の華人がこの問題にどう対応しようとしているかを論じている。

外部社会に「本場」を持つことで、自分たちが直接関わらない出来事であるにもかかわらず「本場」の動向の影響を受け、その名声や悪評が直接関係ないはずの自分たちに降りかかってくることもある。西論文は、九・一一米国同時多発テロ以降にイスラム世界に向けられた信仰心と暴力を結び付けようとする論調に対し、イスラム世界の周縁に位置するインドネシアのイスラム教徒が「周縁」の自分たちこそ「本場」以上に本場であるという新しい自画像の模索に取り組んできたことを論じている。

現在いる場で各要素間の境界や関係をどのように定め、各要素の構成をどのように設定するかという問題もある。マレーシアでは、民族間の境界を固定することで混成性の維持と社会全体の秩序の維持の両立をはかってきたが、それは民族や宗教が人々の

暮らしを過剰に縛るという副作用も生んできた。山本論文は、マレーシアのみならず世界中の人々を魅了したヤスミン・アフマド監督作品が描く「もう一つのマレーシア」像から混成性そのものを生きるあり方を探る。

●注

*1 マレーシアの文脈ではマレー人は「原住民」なので華人やインド人のように国外に「故地」があるわけではないが、マレー人は観念上すべてイスラム教徒であり、その意味で中東という精神的な拠り所を持っている。なお、かつての移民研究がホスト社会の存在を前提として、社会の混成性を捉えるときに移民だけを混成的要素として見ていたのに対し、ホスト社会も移民も混成的要素としては同列であると早くから指摘していた研究として（平野一九八四）を参照。

*2 土屋健治は、植民地時代のインドネシアを事例に、周辺各地の人々が教育や行政などで首都バタビヤに集まり、そこで各地の文化を持ち寄って混交文化を産みだし、それが各地に還流することでインドネシア文化が生まれたとして、域外と繋がりを持った諸要素が混じることでフロンティア空間において混成的な文化が生み出されると論じている（土屋一九八八）。ただし、土屋が言うフロンティア空間とは、各要素の周縁部まで含めてインドネシアという領域にすっきり収

まっております、社会外部との繋がりには意識されていない。

*3 この観点からマレーシア社会を描いたものとして（山本二〇〇六）を参照。

*4 インドネシアの事例をもとに「国民」想像の共同体」説を展開したベネディクト・アンダーソンは、人々が自己解放を求める欲求の表現形態であるナショナリズムがしばしば互いに戦うことについて、植民地統治のもとで人々が自己解放に目覚める前に領域国家内での権力との関係を意識させられるという過去に原因を求める説明に加え、世界的な出来事を契機に「本国」との関係において排他的な我々意識が生じるためという現在に原因を求める説明を試み、後者を「遠距離（遠隔地）ナショナリズム」と呼んだ（アンダーソン二〇〇五）。

*5 本文で挙げた例では、前者は中華世界とキリスト教世界の二つの「世界」と関係しているし、後者はインド世界と英語世界の二つの「世界」と関係しているということになる。

*6 ベトナム国民の人口の九割近くを占める多数派のキン族は、かつて北方の文明国である中国に対して自らを南方の文明国である「南国」と位置づけ、文明意識の裏返しとして周辺の諸民族を蛮族と見ることでベトナム社会の多民族性を自覚していなかったが、フランスによる植民地支配などの経験を経て、自らを国際共産主義という中国との関係以外の「世界」に位置

づける考え方が生まれ、自らの多民族性を自覚するようになった（古田一九九五）。

●参考文献

アンダーソン、ベネディクト著、糟谷啓介・高地薫ほか訳（二〇〇五）『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社。

土屋健治（一九八八）『インドネシアの社会統合——フ

ロンティア空間についての覚え書き』平野健一郎ほか著『アジアにおける国民統合——歴史・文化・国際関係』東京大学出版会、一四三—一八八頁。

古田元夫（一九九五）『ベトナムの世界史——中華世界

から東南アジア世界へ』東京大学出版会。

平野健一郎（一九八四）『国際関係論の新しい概念としてのエスニシティ（概念装置としての有効性と問題点）』『教養学科紀要』（東京大学教養学部教養学科）

第一七巻、二二—一八頁。

山本博之（二〇〇六）『脱植民地化とナショナリズム——英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会。

●著者紹介

二二五頁に掲載。